

障害児保育におけるコンサルテーションの意義について

The significance of consultation in children with disabilities childcare

中山 政 弘¹・伊 達 あゆみ²・牧 正 興¹
Masahiro Nakayama・Ayumi Date・Seikoh Maki

はじめに

障害児保育の実践は、1974年に示された「障害児保育事業実施要項」に始まり、近年の平成17年の発達障害者支援法施行以降、平成19年より始まった特別支援教育体制推進事業の推進など、様々な実践がなされてきた。そこに加藤（2005）などによる幼稚園・保育園での幼稚園教諭・保育士向けの研修会や事例検討会での実践を通じた対応力への支援などが挙げられる。幼稚園や保育園に通ってくる発達障害の診断を受けた子どもや、医療機関へつながる前のいわゆる「気になる子ども」への対応に日々悩んでいる保育者も多い。そのような中で保育者たちは、発達障害の特性を学んだり、その特性に合わせた関わりをいかに普段の生活や活動の中に取り入れていくかを問われていると同時に、様々な支援のニーズはますます高まっていると思われる。

そのような支援の中で、コンサルテーションと呼ばれる手法の重要性が挙げられている。コンサルテーションとは、中西（2010）によると「専門を異にする社会人同士の、対等で自由な関係の中で行われる、地域社会への介入方法」であり、外部の専門家（コンサルタント）によってもたらされる、幼稚園教諭や保育士といったコンサルテーションを受ける側（コンサルティ）の問題解決の援助や援助能力の向上を目的とした関わりである。また、浜谷（2002）は保育園でのコンサルテーションについて、保育士を支援することで子どもに対して間接的支援を行うことであると述べている。以上のことからコンサルテーションとは、コンサルティによる子どもたちへの直接的支援であると同

時に、コンサルタントによるコンサルティを通じた子どもへの間接的支援という2段階の支援であると考えることができる。コンサルテーションにおける幼稚園教諭や保育士にとっての意義だけでなく、コンサルタントとして介入することにも多大な意義があるものと思われる。

その一方で、いわゆる「小1プロブレム」と呼ばれる保育園・幼稚園から小学校へと活動の場が移る中で、適応の難しさの要因として発達障害の問題が指摘されている。それを受けて、専門家が幼稚園・保育園に出向いて児童の様子を観察し、幼稚園教諭・保育士や保護者と今後の支援の方向性を探る巡回指導の形で支援している実践報告もある（田中ら、2007）。特に発達障害を持つ子ども達の小学校への適応は、環境の変化への弱さから多くの配慮が必要であると考えられており、移行支援と呼ばれるようにこれまでかかわった多くの大人たちが一堂に会してこれまでの支援や今後の支援の在り方、また保護者の思いを共有する大切な場ともなっている。さらに小学校での支援をふまえた幼保小連携という視点から、幼稚園・保育園でどのような支援を行うかということも大切な問題である。小学校生活をふまえて、幼稚園や保育園での生活を組み立て直すことや活動内容を再考することは、対応へのリスクを可能な限り少なくする一方法とも考えられる。

これまでの研究においても、保護者と幼稚園へのコンサルテーションを同時に行った実践報告は少なく、特に幼保小連携という観点から行われた障害児保育へのコンサルテーションの報告を行い、コンサルタントやコンサルティの視点からの意義を考えることは、障

1 人間関係学部子ども発達学科

2 駒鳥幼稚園

害児保育を進める上で重要な課題である。

目的

本稿では幼保小連携という視点から幼稚園において保護者も交えたコンサルテーションを行った事例を報告し、その意義、とくにコンサルタントとコンサルティの意義について考察する。

事例提示

1. 対象とコンサルテーションの枠組み

1) クライアント：Aくん

6歳男児、B幼稚園年長クラス

診断名：自閉症スペクトラム障害

コンサルテーションまでの経緯

出生時は異常なし。運動・言語発達の遅れはなく（初語1歳4ヶ月・初歩1歳3ヶ月）、C県での3歳児検診では人見知りも目立たず、特に指摘もなかった。X-2年D県に転居。元来、多動・衝動性が目立ち、特にX-1年の夏休み明けから、気に入らないことがあると他児を叩く・噛むなどの問題行動が増えた。かんしゃくや奇声を指導しても概ね効果は得られなかった。

その年に、保健師に相談し、保健師からD県発達障害者支援センターを紹介され、センターでの相談からE病院受診となった。

【現病歴】

幼稚園での問題行動が増加し、加配の教諭もいるが対応に困っていた。以前通園していた保育園からの情報では、目立つ行動を繰り返し注意されると面白がり、保育士が注意してもほとんど伝わってない様子で、指導と反対のことを行っていた。注意が逸れやすく、じっと座ってられない。今していることを忘れることがある。周囲の状況が理解できず、他児の動きや活動の流れに合わせられず、身支度にも時間がかかっていた。また、独り言が多く、クルクル回る、頭が痛くなるまで側転するなど、一つのことを執拗にやり続ける。友達との喧嘩の際に以前のトラブルを思い出し更に怒ったりしている。

家では兄の前では大人しくしている。一緒に遊べる日と遊べない日の差が大きい。外出する予定があって、準備している間にTVに夢中になって「僕は家にいるから皆で行って来て」と言うことがあった。自分の間違いを認めず、「こんなの嘘だ」、「嘘つき」と言う。保護者、特に母親への暴力、暴言が多い。声の調整ができず、突然、奇声を上げる。

●同年E病院受診、心理検査、ASDの診断の後、プレイセラピーと服薬（ストラテラ）が開始された。作業療法や言語訓練、個別療育機関を利用しながら、病院でもプレイセラピーを受けている

2) コンサルタントとコンサルティ

コンサルテーションは第1筆者がコンサルタントとして介入し、第2筆者がコンサルティとしてAくんへの実際の支援を行った。なお、第1筆者は行動療法や自閉症支援を専門としている。

3) コンサルテーションの目的

来年度就学することをふまえて、園での関わり方についての支援・指導

4) コンサルテーションの流れと手続き

このコンサルテーションは、X年11月に行った。

D県の特別支援教育事業*における巡回指導を行う専門家として幼稚園に出向き、コンサルテーションを行った。

※特別支援教育事業とは、文部科学省の特別支援教育総合推進事業の中で、各都道府県において実施されている事業のことであり、各学校（保育園・幼稚園から高等学校まで）の現場の教員を対象とした研修や専門機関との連携を目的とした特別支援連携協議会の設置、そして本稿で挙げている外部専門家による巡回指導などが含まれている。巡回指導とは、各学校に配置されている特別支援教育コーディネーター（以下、SENCO）がそれぞれの学校での支援の調整にあたる一方で、外部からの専門的意見を参考にしたい場合に活用されるもので、センター的機能を有する特別支援学校のSENCOによる巡回指導と臨床心理士や医師による巡回指導がある。しかし、都道府県によってすべてのケースでまず教育的見地から特別支援学校のSENCOが巡回指導を行い、その後さらに心理や医療的側面からの指導が必要な場合に臨床心理士や医師による巡回指導を行う2段階モデルと各学校のニーズに合わせて特別支援学校のSENCOか、臨床心理士や医師による巡回指導を行う1段階モデルのどちらかが採

用されている（図1および2参照）。そして、それぞれのモデルによって巡回相談でのコンサルタントの役割は異なってくると思われる。それぞれのモデルに共通して外部の専門家であるコンサルティは関係機関や各学校の職員など全体的な組織や人の把握や調整が求められる役割であるが、2段階モデルでは教育という立場では同じである特別支援学校のSENCOが各学校のサポートを行い、外部の専門家が子どもや保護者のサポートを行いながら、各学校との調整を図るケースも考えられる。

今回のコンサルテーションは2段階モデルでの専門家による巡回指導を行った。

手続きとしては、まず現在までの園での支援や様子の確認をした上で本人の様子を観察し、その後コンサルティや園長に加え、保護者も同席してのミーティングの中で情報の共有とコンサルテーションとした。

2. コンサルテーションの実際

1) 情報収集

園での支援についての状況について概略を聞いた上で、実際の場面を観察した。

支援の概略を聞く中で、以下の2点が明らかになった。

●環境の整理や肯定的な言葉かけと評価

本人が理解しやすいような教室や活動時の環境に配慮し、できていることを確認してほめることを中心とした関わりを行うことで、コミュニケーションが発展し、問題行動は減少しているとのことであった。

●個別のスケジュール

自立的な行動には至っていないが、担任などが横につきそって、本人用のスケジュールを提示しながら見通しを持たせていた。また、課題ができればスケジュールの活動欄に花丸をもらえることで意欲的に活動できるようになった。ただ、評価の基準が曖昧なために、教員によって評価が分かれることもあった。

実際の場面の観察も行い、その観察した場面としては、発表会の全体練習とクラス単位の練習、そして自

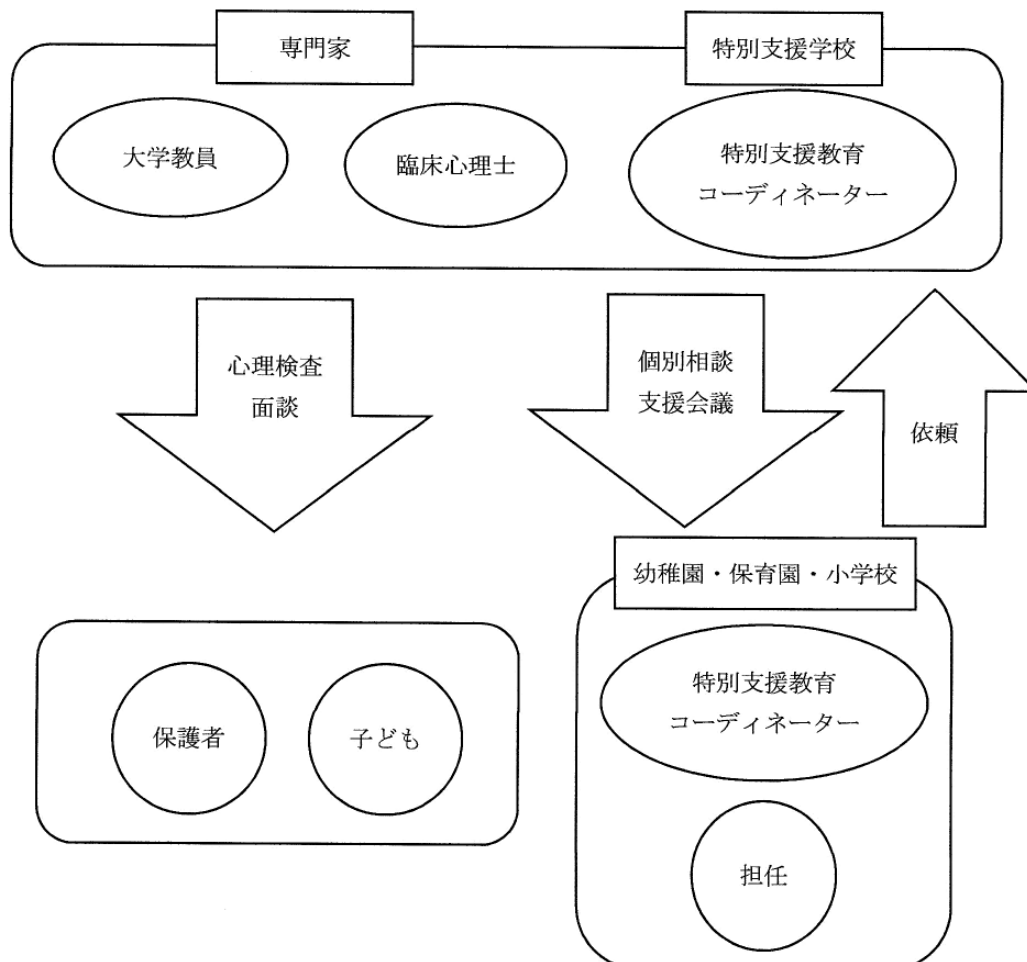


図1：特別支援教育事業の1段階モデル

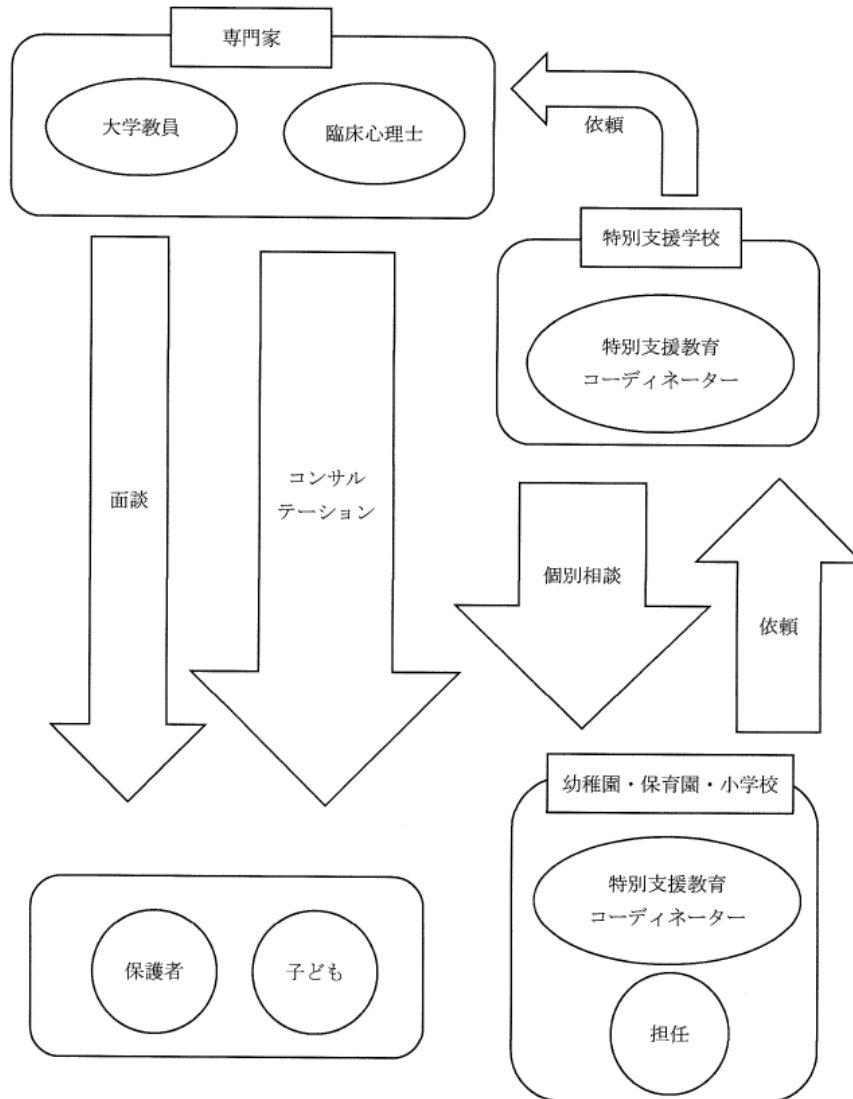


図 2：特別支援教育事業の 2 段階モデル

由遊びの場面であった。

実際の場面観察にあたって、実際の支援が行われていない場面と支援が行われている場面の比較を行うために、発表会の全体練習では、前半は舞台の大きさをビニールテープで示し、子どもたちの舞台の上での並び方を試すなど全体練習の進め方をコンサルティたちが話し合いをしながら進めるという、見通しが持ちにくい状況での A 君の行動を観察することとであった。通常の練習場面では、このように見通しの持てない練習に参加するということはないということとであった。その状況ではやはり A くんは全体の活動内容が明確でないうえに、自らの活動も不明確な状況になったために練習の場所として集まっていた大きな教室の中を走り回る様子が見られた。後半では練習の進め方が決まり、A くんをはじめ子どもたち全員の練習内容が明確

になると、集中している様子が見られた。

クラス単位の練習では、教室に移動して練習することになった。教室ではコンサルティが練習する内容を紙に書いて前に張り出し、その手順に沿って練習を進めていた。この配慮によって、A くんをはじめ子どもたちも練習の順番や内容、練習する回数などが明確になり、落ち着いて練習に取り組むことができていた。

最後の自由遊びでは教室の様々な場所で遊んでいる子どもたちの中で、少し離れたところで絵を描いている A 君の姿が見られた。他の子どもがかかかわってくると、自分からその場を離れる様子も見られた。

2) コンサルテーション

ミーティングの中で、参加者間の情報の共有ならびにコンサルテーションを行った。ミーティングには、コンサルタントと保護者、コンサルティ、そして特別

支援学校の SENCO が参加した。

コンサルテーションでは、それぞれの参加者から家庭や園での様子が説明され、コンサルタントがそれについてコメントするようにした。矢印 (→) 以下の内容は、コンサルタントからのコメントである。

●家庭での様子

保護者対応では、家庭での様子を中心に情報の共有を行った。C 病院を受診した後は、以前よりも暴言や暴力は減少したとの報告もあった。X-1年8月から服薬も開始し、より安定しているものの、様々な不安・心配もあるとのことであった。

→服薬の影響もあり、安定してきたことはもちろん良いことであるが、なおかつ不安・心配があることについては園での環境や周りからの支援、本人の気持ちや意欲を育てることも大切であり、この機会を利用して、どのような手立てが考えられるかを確認していくこととした。

●園での様子、本児の特性など

コンサルティからは、園での様子やそこから考えられる A くん の障害特性について共有をした。

午前中の活動後に、柱に頭を打ち付けたり、つめかみなどを行っている様子が時折見られ、まわりの友達が声をかけると余計にそれらの行動が見られるとのことであった。そこで、午後は事務室での活動が多く、個別のワークを準備されているとのことであった。コンサルティたちの話し合いの中で、事務室は本人が落ち着いて過ごせる場所にもなっているとの考えによる対応であった。

給食は教師とテーブルで二人で向かい合って食べる時は、落ち着いているとのことである。また、近くに友達がいると叩いてしまう時があり、そのことは自分でも認識している様子で、友達が近くに来ると「来ないで」「寄らないで」「僕、叩くけん」と言う場面も見られるようになった。

園の行事の練習では、頑張りすぎて疲れてしまうことも多く、運動会の練習は1日1回だけ参加し、全体の説明を聞いた後は、担当がついて制作などの活動を個別に行うことになっていた。

→集中のし方が、例えるなら短距離走のように短時間に一部分に集中する強みがあるものの、その反動で疲れやすくなり、結果として苛立つことも多

くなっているために、お友達に手が出ている可能性も考えられる。その一方で、年齢相応に自分のことが見えるようになっているからこそ、手が出てしまいそうなことを伝えようとしているのではないか。これは、自分の気持ちのコントロールにつながる部分であるから、そこに気付いていることはとても良いことであると思われることを伝えた。

●就学について

また、保護者から次年度の小学校入学についての話題が挙げられた。夏の就学相談会で知能検査 (WISC-III) をとったが、得意なところと苦手なところありアンバランスであるという説明のみを受けていた。

保護者がどのようなクラスを利用した方がいいかを判断する材料として、また A くん自身の反応を見るために D 小学校の特別支援学級を見学した際に、現在そのクラスを利用している子どもを見て、「大きいお兄ちゃんだけど、僕みたいなんだ。部屋を走り回る、ケンカを吹っ掛けたり、叩いたりして、僕みたいでしょ？」と言っていたとのこと。

就学に際しての支援学級の利用については両親で意見が分かれていて、母親は特別支援学級を利用した方が良いと思うが、父親は「はじめから特別支援学級でなくても良いのではないかと交流学級を希望しているとのことである。

→特別支援学級に在籍しながら、教科によって交流学級で学習をするという形で両方の学級を利用した方が良いと思われる。交流学級でうまくいかなかったから特別支援学級を利用するのは、自己肯定感が下げることにもつながると思われる。また、現在事務室を利用して落ち着いて活動できているように、特別支援学級を利用して落ち着いて勉強するという前向きな考え方をすることが大切であり、就学については、最終的には本人に説明をすることも重要であることを伝える。何のために特別支援学級を利用するのかという目的意識を持たせることも大切であり、主治医と相談することを勧める。

●今後の支援や対応について

さらに、就学をふまえて現時点でどんなことに気

を付けて関わった方が良いかということや今の関わりの中で気になっていることを挙げてもらった。

➤おとなしい子に手を出すことがある

理由を尋ねると、「だって、変な顔したもん」「小さいもん」という返答が帰ってきて、どのように指導していいのかがわからない。

→本人なりの理解や受け止め方をしている可能性と、言葉が自分自身の気持ちを適切に表現できていないこともあることを伝えた。実際に観察した中でも、自由遊びの場面で絵を描いていると他の子が見に来ただけで、不満を口にしてお絵描きをやめる場面が見られた。Aくんは状況を把握することの苦手さがあることで、勘違いをすることがあり、それがトラブルにつながることもある。コミュニケーションの苦手な子どもたちは自分が感じていることを伝えるときに、実際に感じていることを言葉にうまくつなげられないでいることも多く、他児に対するマイナスイメージを持っている可能性もあることを伝える。

また、勘違いであったとしても、まずは気持ちを受け止めること。その上で対処法として「手を出す」ということが問題であり、その場合にどのように対処したほうがいいのかをコンサルティと決めておくことなどが指導の一方法であることを伝える。

➤自分の気持ちを言葉でうまく表現できない。

友達に手が出ることの話から、自分の気持ちをうまく表現できていない事実が再確認された。園でも「○○ということかな」など、尋ねていく中で少しずつ表現できていることが増えているとのことだった。保護者からは療育機関でのOT（作業療法）やST（言語訓練）などでも、体の使い方、バランス、力の入れ方なども気になるが、パーソナルスペースや人との適切な距離感、力加減、声の大きさなどが気になるとの指摘があり、その訓練もしているとのことであった。

→体の使い方については専門ではないが、確かに体の動きをコントロールすることは気持ちをコントロールすることにもつながっており、その

中では言葉を使ったコミュニケーションも含まれていることが考えられる。コントロールだけでなく、自らが感じていることを表現することが訓練や園の生活で多少とも増えていく今の関わりは特に重要であると、伝える。

➤他の子どもたちと共に活動することについて、本人の気持ちを優先すべきか。

例としては、様々な活動を「皆と一緒にやりたい」ということが多い。加えて、午後の時間帯は本人が疲れていることもあり、早く帰っているが、「皆と一緒に帰りたい」と言うことが多いとのこと。

→本人の気持ちも尊重することも重要ではあるが、周りから見て疲れている状況で、本人が希望しているからといって一緒に活動に入ることは、結果としてトラブルにつながることも考えられる、それは本人の失敗体験につながる可能性もあり、あえて違う活動を選択することが本人にとっても大切であることを伝える。

しかし、楽しい活動や落ち着ける活動だけでなく、教師と行事の準備をすることや何か役割を持たせるなど、活動の目的をはっきりさせ、それを本人にも伝えることが大切である。一人だけ活動が違うことへの意味づけを行うことによって納得しやすいことも考えられ、そのことによって本人も充実感、達成感を持てるようになるであろうことを伝える。また、このことが、小学校での交流学級と支援学級の両方に参加することの説明にもつながるであろう、と返す。

●コンサルテーションのまとめ

最後にコンサルタントから全体を通してのコメントを行った。

➤園での活動を観察している中で、発表会の全体練習など刺激が多い中で話を聞くことや状況に合わせて待つこと等、臨機応変さを求められることへの対応が苦手で、混乱してしまうことが観察された。クラス単位の練習等で、できることが明確であれば活き活きと活動できており、活動の設定のあり方が重要であると思われ、頑

張ることと楽しいことのバランスが大切であること

- これらの配慮は遊びの中でも重要なことであり、遊びもわかりやすく設定できるものに参加させていくといったことが大切であること。一方、友達と遊ぶ時間と、一人で遊ぶ時間の両方があることを前提に、時間で区切るなどして、わかりやすくすることが大切であること
- 教師によって答える内容が違ってくると、混乱する可能性もあるため、メール等により情報を共有しておくことが必要であること
- 友達を叩くことや、それを我慢して自分を傷つけてしまうことは双方にとって辛いことであり、気持ちのコントロールや活動のペース配分について、今後、学習していく必要があること
- 穏やかで落ち着いている状態をできるだけ多く確保することと、その方法を多数見つけることが重要で、気持ちの回復を図るために、場を離れてひとりになる状況を作ってあげることも必要で、自ら「イライラしてきたから〇〇をする」という判断はまだ難しいため、大人が仕組んでやることも場合によっては大切であること
- 今回、園での様子と保護者からの家での様子を共有できたことは大きな意味があり、そのことが園での関わりがさらに改善されることも予測できる。家庭でも新たに対応方法が見つかるかもしれないということ
- 保護者自身が子どものことを話して今後のことが相談できることはとても大切であり、療育機関などへの相談も続けていくことと、今回のようにコンサルテーションが園にとっても意義があると感じられたら再度利用することも可能であるということ

3. コンサルテーション実施後の状況

コンサルテーション後にコンサルティから連絡があり、その後の行事でもいくつか工夫を行ったとのことであった。

その一例として、次のような取り組みがなされた。

- 発表会の劇の練習:自分のセリフを話した後は、舞台裏に移動し、次のセリフの練習をすること

で待つ

- 楽器の演奏会:楽器を鳴らすタイミングを小さいプラカードを作って、それを見せるときが音を鳴らすタイミングであることを確認させ、当日もそのプラカードを使うことでタイミングを合わせることができた。
 - 卒園式:自分の出番が来るまで教室でブロック遊びなどをしながら過ごし、出番が来る少し前に声かけをして自分の出番に備えるようにした
- また、Aくんの他にも支援が必要な子どもが在籍しているとのことで、発表会の練習に関してはそれぞれの子どもの舞台裏での待機場所を決めておくことや、練習を1日1回と決めておき、練習の終了時間を伝えて見通しを持ちやすくしたとのことであった。

また、小学校入学を控えたX年3月には、関係機関を交えての移行支援会議を行ったり、コンサルティはこれまでの園の様子や、上記のような園での様々な対応・支援の方法について報告したとのことであった。

考察

今回、発達障害を持つAくんの園での実際の行動観察や状況を伺うことに始まり、保護者も交えた支援会議を行うという過程を通してコンサルテーションを行うことにより様々な発見があった。また、それぞれの参加者からの発言を共有したり、まとめていく中で、以下のようなことが明らかになった。

1. 穏やかで落ち着いている状態を維持するために、集団から離れてひとりで過ごす時間を定期的に設け、気持ちのリズムを作ることが大切であること
2. ひとりで過ごす時間は、身体を動かす活動と静かに過ごす活動の両方を用意する。本児の好きな活動をアセスメントし、小学校へも伝えていく必要があること
3. 対人関係では、偏った理解の仕方をしてしまうことが多いため、誤解や勘違いによるトラブルが生じる。まずは、本児の気持ちを受け止めることが大切であること
4. 人との距離が近いと不安になり攻撃的な行動に出てしまいがちなため、安心できる距離を確保し

てやる必要がある。周囲の子ども達との距離にも配慮する必要があること

5. 声の大きさや力加減など生活の中で必要なことについては、療育機関とも連携し視覚的な方法で教えていくと分かりやすいこと

また、今回のコンサルテーションにより、コンサルティがその後の行事等で様々な工夫を行いながら支援をより良いものにしていき、小学校に対してもその実際を伝えることによってスムーズな移行が可能となった。

以下、今回のコンサルテーションがどのような意義を持っていたのかについて考察を深める。

コンサルテーションにおける機能（加藤，2013）、つまり「心理的側面についての客観的理解の促進」「職員関係の強化」の視点から、その意義について考えていきたい。

「心理的側面についての客観的理解の促進」という点については、園や保護者が挙げてくるAくんの行動について自閉症スペクトラム障害の特性という視点から説明を行い、どうしてそのような行動が発現するのかについての理解を深めてもらうこととした。今回、ミーティングでの参加者の発言に対して、コンサルタントは常に綿密なコメントを行った。このことがミーティングの参加者からの発言や質問がコンサルタントへのコメントにつながり、それをまとめるという形をとることで、Aくんのケースを普段かかわっている人だけの視点だけではなく、異なる視点から理解をしていき、さらにそれが全体的な理解につながっていったと思われる。単にAくんの行動の意味だけではなく、後述するような園や家庭での関わりにおいても周りの大人が同じ方向から支援していることの確認にもなっていたと思われる。さらにコンサルテーション後にコンサルティがAくんのその後の行事で様々な工夫をしたことからAくんへの理解が深まったことが示唆される。単にAくんの行動理解だけでなく、どのような要因からその行動が見られるのかといった背景からの理解がすすんだことで、以降の行事においても練習の進め方や、どのような点に注意を払えば良いかが自然とイメージできるようになったと思われる。「見通しを持つ」などこちらが提案した内容をそれぞれの場面で具体的な支援の形に落とし込むためには、

発達障害の特性などの基本的な枠組みの理解と、それを踏まえた柔軟な発想力が求められる。加えて、コンサルティはAくんの他にもいる配慮が必要な子どもたちへの支援も行っているため、単にAくんにとっての配慮が周りの子どもにも理解しやすくなったというだけではなく、配慮が必要な子どもたちへ関わる上での必要なポイントが理解されていることが明らかになった。

一方、「職員関係の強化」という点については、加藤（2013）が施設コンサルテーションの機能を明らかにした研究からも、今回の支援会議でのコンサルテーションについては、保護者も参加していることから、その意味では保護者と職員との関係を促進させることも機能が働いていたことが予測される。Aくんの行動を発達障害の特性という視点から説明することによりさらに理解が深まると同時に、コンサルティもAくんの特性を適切に理解し、対応ができていることを伝えることを重視した。その一方で、保護者から家庭での様子や気になることなどを引き出し、その内容を園での取り組みや今後の支援の方向性のヒントとして役立ったのではないと思われる。先述したようにコンサルテーションはあくまでコンサルティのサポートが中心である。Aくんの理解や対応についてもコンサルティが自分自身の実感として行っているかが重要となる。こちらからの一方的な説明だけではなく、実際に対応できていることの評価が大切であると考えられる。

これらは、コンサルティの視点からも重要であったと思われる。特別支援教育事業の中でも、各学校のSENCOを中心に園や学校単位で保育士や教員どうしがアイデアを出し合い、解決していくという形は発達障害を持つ子どものケースだけではなく、基本的かつ重要な方法であろう。しかしその一方で、保育や教育という視点から考えられるアイデアは、それぞれの経験の差はあるとしても、基本的な考え方には、それほど大きな違いがないとも言える。外部の異なる領域からの専門家によるコンサルテーションによって新しい視点が持ち込まれたり、新しい気づきが得られることで、支援の方向性ややり方に新しい展開が生まれることは、特に意義深いことであると思われる。

また、重松（2014）はコンサルテーションの様式と

して、①特定の事例に焦点を当てた「問題解決型」②複数のものを対象とする「研修型」③組織への援助的介入を行う「システム介入型」の3つの分類をしているが、本事例はその中の①と③を合わせた形であると思われる。Aくんの事例について、園での様子を観察したり、保護者から話を聞く中で、今後の支援の方向性を提示することができただけでなく、コンサルティだけでなく教員同士によるAくんとのかかわりを統一的に言及するなど、園での支援体制へのコメントや、状況把握、家庭や療育場面での状況を保護者に聞くことによって、保護者と園との連携を進めることができた。

近年、多職種でのチームアプローチが様々な領域で重要視されている。今回のコンサルテーションも、特別支援学校のSENCOなど様々な立場や職種の人間がかかわり、それぞれの視点から情報を出していくことに加え、それらの情報や意見をまとめていくことで、それぞれの視点が共有され、次のステップの支援の方向へとつながったと思われる。今回のケースではコンサルタントが中心となって共有作業を行っていったが、必ずしもコンサルタントがリーダーシップをとりなが

ら進めるケースばかりではなく、他の参加者がミーティングの進行をする中で、全体の動きをサポートするという形でコンサルタントが介入することも考えられる。コンサルタントがどのような役割を取るかはともかく、多職種がそれぞれの立場から発言し、その情報を共有することもコンサルテーションの意義の一つであったと思われる。

引用文献

- 浜谷直人 2002 保育におけるコンサルテーションとは何か．東京発達相談研究会・浜谷直人編2002保育を支援する発達臨床コンサルテーション．ミネルヴァ出版．pp11-23.
- 重松孝治 2014 障害児保育における技術向上を目指したコンサルテーションの実践．川崎医療短期大学紀要，34, 47-51.
- 加藤三雄 2005 統合保育へのコンサルテーション．豊橋創造大学短期大学部研究紀要，22, 53-63.
- 加藤尚子 2013 児童養護施設における心理コンサルテーションの機能に関する研究．心理臨床学研究．31（4），663-673.
- 田中良三・山本理絵・小淵隆司・神田直子 2007 発達障害児の幼児期から小学校への移行支援．愛知県立大学児童教育学科論集．41, 51-67.